

◆第6分科会 地域資源活用型まちづくり

フットパスを通じた観光と環境～町内フットパスを巡り、身近な環境から考える

●講師	株式会社 二世古楽座代表取締役	工藤 達人
	エコ・ネットワーク代表	小川 巖
	エコ・ネットワーク代表代行	小川 浩一郎
●コメンテーター	法政大学特任教授・環境自治体会議アドバイザー	白井 信雄

第6分科会では、ニセコ町の地域資源である「フットパス」を通じてニセコ観光の魅力やニセコの自然環境への理解を深め、自然のすばらしさとニセコの自然環境のすがたを学ぶことを目的に開催した。楽しみながらの住民力の養成を目指した。

●スケジュール

- 9:00 綺羅乃湯集合（フットパススタート地点）
フットパスについての説明。
10:30～ ニセコフットパス
15:00 綺羅乃湯温泉到着

●「すべてにつながる道・フットパス
—住民力を活かした地域づくり—」
エコ・ネットワーク代表代行 小川浩一郎
フットパスとは??

イギリス発祥の「(歩くことを楽しむための) 歩行専用の道」のことで、正式名称は『パブリック・フットパス (Public Footpath)』という。公共の歩道のことで英国国内を網の目のように通っている。日本語では、「公共人道」「国設歩道」とも訳すことができ、公園や海岸線、国有地の他に私有地も多くコースとして設定されている場合が多い。長いものでは1,000 kmほどの長距離歩道もあり、農場、牧草地、海岸線、河川敷、市街地、崖、森林、丘陵地、ゴルフ場、政府施設の中をコースが通ることもある。人が『歩く』ことのみ許されている。

フットパスの歴史

フットパスは、土地領有者に対する農民の権利奪還運動から始まった。引き金になったのは18世紀後半の

産業革命で、土地所有権が発生したことにより、人が入れる部分と入れない部分が生じた。当然のことだが、歩く道は土地所有が発生する以前から存在し、農地、放牧地、庭園、工場、鉄道などはずっと後になってから出来たものである。

19世紀中頃から都市民による歩く権利運動へと発展し、1932年には「歩く権利法」が制定された。その後、「歩く権利法」により土地所有のいかんにかかわらず、かつて住民が歩いていた道を「Public Footpath」と認定し、誰もが歩ける道にした。その後、数度の改正を経て今日に至っている。

通行権とは？

イギリスでは日本とは異なり、フットパスとして誰でも歩くことが出来る『通行権』が公共の権利として認められる。例えば、現在は個人所有の住宅の庭になっていても、昔から地域の住民たちが歩いていたことを証明できれば、引き続き通行し、通り抜ける権利を得ることが出来る。ただし、通り抜ける際には「道」から外れてはならない。フットパスの管理は土地所有者の責任となり、私有地の場合は所有者が道の補修、ゲートの整備、草刈りなどを行わなければならない。所有者との間で係争や利用妨害などの問題も起きている。

ドイツや北欧の国々では『アクセス権』という歩くための法律があり、英国よりも寛容な中身になっている。

ランブラーズ協会 (The Ramblers)

ランブラーズ協会とは英国内最大のウォーキング団体で、フットパスのウォーキング環境の整備や景観保護などの調整を行っている団体である。土地所有者とフットパスウォーカーとの摩擦や、整備がされていない

いフットパスの土地所有者との話し合いなどを行っている。その他にもフットパスウォークの普及・啓発活動なども行い、各地でフットパスウォークを通じた地域おこしや活性化にも成功している。

日本でも『日本フットパス協会』が設立され、全国のフットパスの普及活動を始めている。

英国のフットパスを歩くために

初めて歩くための重要なアイテムはマップである。イギリスでは、「OS マップ (Ordnance Survey)」という 1/25,000 のコースマップが販売されており、誰でも簡単に購入することが出来る。コース上には道しるべが至るところに貼られてあり、歩いていてとても分かりやすい。簡単な矢印もあればナショナルトレイル(フットパスの国道)のシンボルマークのドングリが描かれているものもある。トイレも重要だが、町にあるパブ(レストラン兼居酒屋)を利用することが出来る。パブの場所は駐車場とともに OS マップに書き込まれている。OS マップはまさに歩く人のためのマップ。現在は「オープン・ストリート・マップ」などにより世界各地で、WEB 上またはタブレットやスマートフォンのアプリがあれば、歩ける場所も多い。

フットパスの楽しみ方

「歩くことを楽しむ」とはどういうことか? 「道」といっても世界中に全く同じ道はなく、周辺の景観はもちろん、周辺地域の自然や景観、文化、歴史、建造物、食、そして健康など様々な『楽しみ』の可能性がある。その他にも、歩いている途中に出会うフットパス周辺の地域住民の方たちとの触れ合いや会話、地域の情報など「地域や人とのつながり」もフットパス歩きの醍醐味といえる。

世界のフットパス・トレイル・古道

イギリスだけでなく、世界各国には様々なウォーキングコースがある。

■英国 フットパス【Footpath】

テーマズパス、コッツウォルズウェイ、ペナインウェイなど

■アイルランド トラック【Track】

ウィックローウェイなど

■アメリカ、ニュージーランド、カナダなど トレイル【Trail】

アパラチアントレイル、パシフィック・クレストト

レイルなど

■スペイン、フランスなど 巡礼の道【camino (de santiago)】

フランス人の道、ポルトガル人の道、北の道、銀の道など

※ポルトガル、イタリア、ドイツなどヨーロッパ各地からのルートもある。

■韓国 オルレ【olle】

済州島オルレ

■日本 古道、街道、フットパス、トレイル

熊野古道、木曾路、大雪ロングトレイルなど

日本のフットパス

日本国内で、いつから「フットパス」という言葉が使われ始めたかは、正確には分かっていない。けれども、東京都町田市の「多摩丘陵フットパス」、山形県最上川沿いの「最上川フットパス」、北海道新得町の「旧狩勝線フットパス」が現存する最古のフットパスといえるだろう。フットパスの構想は 1980 年代中盤からあった。しかしながら日本国内にはフットパスとは呼ばれなくても歩く道はあった。

●古道(熊野古道、四国お遍路)

●街道(東海道、甲州街道、平戸街道、鯖街道、萩往還など)

●自然歩道(関東自然歩道、九州自然歩道など)

松尾芭蕉や伊能忠敬などの足跡を楽しみながら歩く人たちもいるし、北海道ではイザベラ・バード、松浦武四郎の足跡も確認できる。現在、日本各地にフットパスやロングトレイルが出来始めている。青森県～福島県の「みちのく潮風トレイル」、山梨県の「甲州フットパス」、熊本県の「美里フットパス」「宇土・宇城フットパス」、沖縄県の「宿(しゅく)道」など他にも多数ある。

財団法人 日本フットパス協会

財団法人日本フットパス協会は、東京都町田市に事務局を置いている。フットパスを全国に広げるために活動しているが、具体的な内容としては、まず第 1 に会報発行、ポスター・チラシ等の作成、案内標識・コース整備仕様の標準化、商品開発などのフットパス普及・啓発に関する事業、2 つ目に広域フットパスルート開発、ツアーパッケージ開発、会員連携企画立案、英国フットパスとの連携事業実施などの広域フットパスネットワークに関する研究・開発事業、3 つ目にフットパス

整備のノウハウ提供、会員事業のバックアップ（コンサルタント派遣等）など会員支援事業、最後にフットパス活動がもたらす波及効果（地域活性化、景観・歴史文化保全、農業再生等）の調査・研究、英国フットパス事情・文化の研究などの調査研究・情報収集事業を行っている。

「歩く」ブーム

日本では数年前から『歩く』ブームが始まっている。10年前では『登山』といえば中高年が中心だったが、「山ガール」と呼ばれる若い女性の登山者が急増しており、ファッションなどもうまく取り入れ、ブームになっている。『日経トレンド』が毎年年末にヒット予想ランキングとして、翌年に流行しそうなものや事柄を発表しているが、2013年に流行しそうなもの第1位に『日本流ロングトレイル』が選ばれた。ここで選ばれたことが大きく影響を及ぼし、メディアなどもフットパスやロングトレイルなどの歩く道を紹介し始めている。

北海道のフットパスの始まり

2002年9月に開催された（財）北海道新聞野生生物基金フォーラムで「歩く道の文化英国生まれのフットパスを北海道にも」をテーマにあげたところ、我われの予想をはるかに上回る350名のもの参加者が集まった。2002年が北海道のフットパス元年である。その後2003年から毎年1～2回のペースで「全道フットパスの集い」を各地で開催している。ニセコ町でも第8回目を開催し、今年の9月には西興部村（第20回）、2015年初夏には南幌町、2015年秋には様似町で開催する。

北海道のフットパス

北海道内全域のフットパスの普及や道内にあるフットパスと呼ばれている道の推奨なども行っていくために、2012年4月、「フットパス・ネットワーク北海道（FNH）」という任意の市民団体を設立した。全道でも先進的または古くから活動している団体が幹事として名を連ねており、ニセコ町にも入ってもらっている。今後の活動としては、北海道内の統一のコースサインやカントリーコードの作成など行っていくことを予定している。

北海道のフットパスの特徴として、自然や景観（農業・酪農・漁業地）、食など北海道ならではのものを活かしたコースが多い。観光資源としての要素が強い中、

他にも道民があまり目を向けてこなかった歴史的または文化的なルートも急激に増え始めている。フットパスの管理や普及啓発は、行政が主体になるというより、地域の住民や団体（市民団体、NPO法人、地元の企業など）が主体となり取り組んでいる場合が大多数である。その一方で、近年は行政や観光協会、大手企業が主体となり、進めるケースも増えてきている。道路自体は英国のフットパス同様、未舗装路のフットパスが多い。フットパスを歩くことは、地域をよりよく知る機会であり、フットパス近隣の住民とのコミュニケーションが促進され、地域の活性化に寄与することにもなる。しかも歩くのに特別な費用はかからないし、歩く場所や時期を選ばないので、メリットだけである。もちろん歩き終わった後に飲むお酒もとてもおいしいものになる。

北海道のフットパスの王道は農村地帯や、酪農地帯を歩くものである。他にも江戸幕府によって作られた道を歩けるコース、河川敷沿いや湖沼周辺の道、都市近郊を歩くアーバン・フットパス、北海道には廃線跡が多いので廃線、廃道跡を歩く道、炭坑や施設、史跡など歴史や文化に触れられるフットパスなどがある。

フットパスは、これまで北海道にはなかった「歩く観光」のきっかけになり始めている。また観光だけではなく、スローな活動のひとつとしてフットパスが位置付けられ、地域間の交流や、地元の再発見にもつながっている。またフットパスは行政に頼らず、住民主体で作り上げることが可能で、住民自身の自信にもつながる。現在北海道で起きているフットパスを中心とした動きは、北海道や自らの地元の良さを確認でき、誇りを持てるようになり、北海道を変えていく力があると思っている。

現在は北海道内すべてを結ぶフットパス「ノーザントレイル」を張り巡らせる構想が現実のものになってきている。ノーザントレイルは統一のコースサインを設置し、統一のカントリーコードも付けるようにしており、2004年から15市町村で使われている。ノーザントレイルを拡張していくロードマップとしては、まず各市町村に1本、そして複数のフットパスを設定（選定）する。続いて隣接する自治体同士でフットパスを結ぶ。次は振興局単位のフットパス網を設定（選定）し、それをフットパスで結ぶ。今まさにこの段階まで来ている。今後は、北海道内をフットパスで結び（ノーザントレイル）、その後は海を越えてロシア・サハリン、あるいは青森（みちのく潮風トレイルなど）と結び、日

本各地へとつなげていきたいと思っている。

広がるフットパスの輪 しかし・・・

フットパスの輪は広がってきたが、今後考えていくべき点もいくつかある。まずはコースの選定に際し土地所有者との軋轢が生まれることがある。それをどのように解消するか、そしてどのようにコースを維持していくかという根本的な課題があげられる。そしてコース歩きに必要なトイレや駐車場整備、コースサインのデザインと全道での統一をどうするかといった課題もある。広報では、マップの作成や配布、公開方法、どのように全道レベルでの情報提供を行えるのか、など課題も抱えるが、今後できるだけ多くの方にフットパスの存在とその楽しさを伝えていきたいと考えている。

●ニセコフットパス「文学・歴史の散歩道」

約1時間30分の座学の後、ニセコフットパス「文学・歴史の散歩道」を参加者約30名で歩きました。このコースは、旧有島農場や町の歴史の跡、第2カシュンベツ川沿いを歩きます。羊蹄山やアンスプリ連邦の眺めと、自然を感じる未舗装の道も多く、緑豊かな環境の下、散策を楽しむことができます。

距離	約10.6km
所要時間	約3時間20分

◆ニセコフットパス 文学・歴史の散歩道





講師：左から工藤氏、小川（巖）氏、小川（浩）氏



きれいな花々が見えました



アンヌプリをバックに



フットパスの道中



羊蹄山に向かって



親子坂入口